

3929 地球のかおり：「鐘が鳴る丘」(産経新聞) 心模様

私が訪ねたのは、クリスマスも終わった厳寒の2月。

スイスアルプス、奥深い寒村での出会い。

季節はもう2月なのに、ホワイトクリスマスのイメージ。

外は、しばれるような肌を刺す寒さなのに

なぜかあたたかく感じたものである。

この旅は、列車の旅だった。

乗り放題のスイスパス入手し、スイス中を駆けめぐった。

ジュネーブを出発点に、ローザンヌ、モントルーのレマン湖周辺から、

バーゼル、チューリッヒ、サンモリッツと

スイス全域を気の向くままに。

車窓を楽しむだけでなく、小さな駅にも下車。

直感で選択。途中下車を繰り返した。ほんまもんの旅らしい道草の旅。

スイスを取り巻く周辺国の街々も興味深い。

イタリアのマジョーレ湖のあるストレーザ、フランス、シャモニーにも足を伸ばした。

国境や辺境は、興味をそそられる領域。一定の距離までは無料だった。

この旅の始まりは、スイスの三大名峰の一つ、

マッターホルンからだだった。周辺の山々にも足を運んで取材、宿泊。

谷の向こうのアレッチ氷河地域にも3泊。

そして、ユングラフロウやアイガー山にもと欲張った旅だった。

出来る時に出来ることを実践。またという機会が少ないのが現実。

フットワークのいい久楽。面目躍如である。

すでに宿泊を重ねているので、雪への抵抗感はなくなっていた。

住人ではない。私は旅人だが、雪が大好きである。

そして、ブリークからユングラフロウをめざした。

まず、インターラーケンまで行き、途中下車。

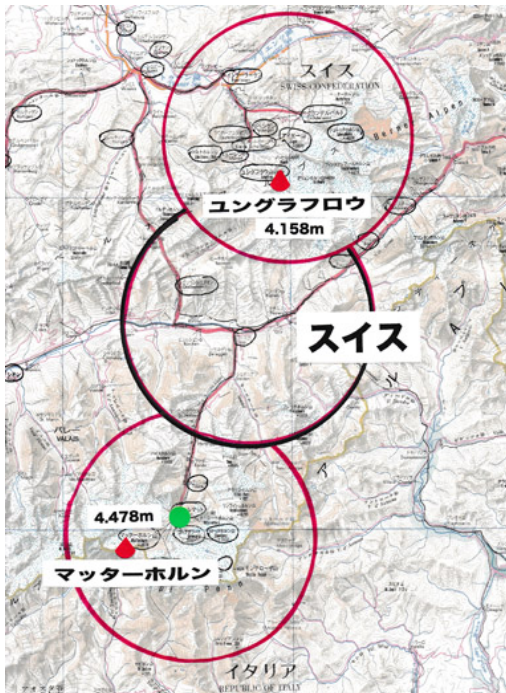
湖の船が動いていれば乗船し、今一度、船から見る景観を見たかった。

ブリークから山深い断崖絶壁の上を列車が走る。

かなり厳しい場所を通過するので、列車は減速され、よく見える。

眼下は谷底。車窓から見る光景は圧巻スイスアルプス。

この感動、なんとか残せないだろうか、ふと、よぎった。



なんというご縁、待っていたかのように、名前も知らない小さな駅に停車。

また直感。後先忘れた無謀？な冒険が始まった。

峠の頂きにある、組まれた木枠だけの小さな駅。ホームに、足跡が少しだけあった。

おもわず下車してしまった。

その小さなプラットホームから見える光景に、しばらく酔いしれた。

しかし、その時間は、ほんのわずか。身体の芯まで冷える。ともかく寒い。

服装もあたたかくしないと、どうにもならない。

階段を下り、改札口に向かった。重ね着もしたかった。

あたたかいショコラも飲みたかった。

改札周辺か、駅周辺に何かあるだろう。軽い気持ちだった。

予想に反し、改札も簡素。駅周辺も、2～3軒の家以外、お店など全くない。
眼前は岩壁。周辺は、白一色の雪景色だった。
小さな駅のプラットホームからの眺望、これだけで下車して充分満足、価値があった。

ふと、この光景、見たことがあるような・・・ ???
そんな思いを抱きながら、次の列車の時間も確認と、戻りかけた時、
ポストとバスが出発するところだった。
「乗らないのですか」と声をかけていただいた。
あまりに雪の多さにいくべきか迷ったが、皆さん、平気な顔をされている。
行き先の名前を聞いてもわからなかった。
しかし、素朴な人の良さそうな面々の笑顔に引き込まれた。直感。これも何かのご縁。
山より大きな獅子も出まい。何とかなるだろう。

もちろん、宿など決めていない。宿がないかもしれない。
国の信用、イメージがものを言う。今の日本は、日本人はどうなのだろう。
少しだけ、旅慣れている。スイスは金融国。信頼がおける国との認識。
駄目なら駄目でいい。戻ればいい。そんな軽いのりで、いつものように、道草を開始。
バスの**車窓からの光景**は、私には**感動の連続**。

村に行くまでの道中、岸壁をくり抜いたトンネルを、いくつも抜けた。
眼下は谷底。断崖絶壁の道を走るバス。
景観は最高なのだが、いささか一抹の不安も・・・
途中、村もバス停らしき場所は全くなし。1時間近くも走ったのではないか。
トンネルを、その後も、いくつも抜けた。

ふと、遠景に、この教会が見えた。素朴でスイスらしい家並みが残っていた。
家々の軒下に、秋田県の「なまはげ」に似たような恐ろしい表情の面がかけてあった。
そして、この教会に近づき、通り過ぎようとした時、見たことがあるような・・・
いや、来たことがある。見た位置も、季節も違うが、思い出した。
バスの最前列に乗車していた。運転手さんに声をかけ、思わず下車してしまった。

思えば、7年前の夏、ナポレオン時代の衣装を身につけた衛兵、
記念日だったのだろう。教会の儀式？ 村の人たちもすべて民族衣装で着飾っていた。
印象的が強烈。画像も残っている思い出の村だった。
今は、何もない白一色の雪景色。宿も見つかった。次々と、事が運ぶのが不思議、
まさに、ラッキー、スマイル、オン、ミー。
宿とレストランが一緒。前回も、この宿だったのではないか。
不思議なご縁の再会。不安があっただけに、何とも嬉しい気持ちになった。

夕食のダイニングの窓からの雪景色、使いこなした木のテーブル、
重厚な艶で光っているテーブル、歴史を感じる。そして、小さなローソク。
この時は、夏ではなく、厳寒の2月。
本場のフォンジュを注文。チーズとワインのブレンド、郷土料理を堪能した。
宿とレストランが一緒だったこともあって、ワインも一本。いささか飲みすぎだったが、
その夜は、疲れていたこともあってぐっすり。快食、快眠の1日になった。
私のホワイトクリスマス。スキー場があったので2泊。
翌日、ここを起点に、東に西に、南に北に、もちろん、スキー場の頂上へも・・・

厳しさのあとの素敵な出会い。神様は試練だけでなく、時々、粋な計らいをしてくれる。
宿から教会も見えるベストポジション。訪ねてよかった。
帰国後も、お便りや資料をいただいた。いい思い出は心の財産。
夢絵として創作したのは言うまでもない。